

平成30年度小麦作柄調査の概要について

北海道立総合研究機構北見農業試験場 主査(育種)大西 志全



音更町中島氏ほ場にて

平成30年6月27日(水)～29日(金)の3日間の日程で、小麦作柄現地調査を行った。参加者は北海道農政部、農研機構北海道農業研究センター、道総研農業研究本部、北海道農政事務所、北海道農業共済組合連合会、ホクレン農業協同組合連合会、北海道農産物集荷協同組合、北海道米麦改良協会、道内製粉会社等の関係機関からのべ57人であった。各現地では、JA、農業改良普及センター、生産者から地域の作柄と当該圃場の小麦の生育状況を説明していただいた。

調査箇所はオホーツク管内3箇所、十勝管内4箇所、上川、空知、石狩管内各1箇所の合計10箇所で、小清水町安田農産、美幌町寺崎氏、平岡氏、浦幌町林氏、音更町中島氏、中谷氏、高橋氏、旭川市日の出生産組合、美唄市吉田氏、恵庭市大橋氏の圃場で調査を行った。調査終了後、共済ビルで検討会を行い、本年度の小麦生育の現況についてとりまとめた。

秋まき小麦の生育経過については、凍上害や凍害、雪腐病による被害が生じた地域があるものの、春先の気象条件に恵まれ、出穂期までは全道的に数日早く進んでいる傾向が見られた。6月中下旬の低温と低日照で、生育の停滞がみられたが、出穂期まで早かったことと相殺され概ね平年並であると推察された。また、調査圃場において病害の大きな発生は見られず、「きたほなみ」では第3、第4小花における粒の肥大も確認できた。さらに、開花前後の気象条件の悪い中、雨の合間をぬって赤かび病の防除はできているとの報告も多かった。春先の好条件で生育量は稼げているが、6月の低温の影響があるのか草丈は平年並～短い事例が多かった。春まき小麦については、開花と結実、赤かび病の防除はこれからであるが、秋まき・春まきともに現時点では大きな問題はないと考えられる。ただし、これから最も日照が必要な生育ステージを迎える中で、しばらく天候不順が続く天気予報となっており、今年の作柄はこれからの天候次第であると考えられた。

最初の調査地の小清水町では、本年は融雪が早く凍上害による被害が例年になく多い年であったとのことである。凍上害の有無は、整地方法や、その後の鎮圧の有無などの影響を受けた他、適期播種と適切な播種深度で越

冬前に十分生育量(根の深さ)をかけげた圃場では凍上害が少なかったとのことであった。圃場を見せていただいた安田農産では、堆肥の投入や心土破碎の全圃場実施などの技術を心がけられていた。

美幌町では雪腐病の発生は少なく、縞萎縮病の発生はやや目立ったがその後回復したとのことであった。「春よ恋」の製品歩留の向上を目的として追肥試験を実施中の圃場を視察したが、追肥の効果があった事例と明瞭でない事例があるとのことで、今後の追肥技術の発展に期待したい。

浦幌町では前作の金時豆の成熟期の遅れのため秋まき小麦の播種は遅れたものの、春先の好天により出穂期までは早く進んだが、開花前後の低温で開花の遅れや圃場間でのバラツキが生じているとのことである。また、3月9日の雨で雪が消失し、その後の低温で部分的に凍害が生じた圃場もあるとのことであった。調査した林氏の圃場では適期播種を励行し、物理性を悪化させないためロータリーは1回しかかけないこと、小麦後にエン麦野生種を緑肥として導入されていることの他、畑のくせを熟知され、手動でブロードキャスターを調節し、追肥量を可変させながら生育を均一化されていることが印象的であった。

音更町では、追肥時に適度な降雨があり、追肥が良く効いているものの「きたほなみ」の穂数はやや少なく推移しているとのことである。「きたほなみ」は外観から見る限り良く充実しているように見受けられた。越冬前茎数が十分ある場合、追肥は起生期ではなく幼穂形成期に行い、適正な穂数で整粒歩留まりを確保するという普及センターの指導が浸透しつつあるとのことで、今年のように登熟期の天候不順が予想される気象条件下では、そのような指導の効果が発揮されるのではと考えられた。



音更町中谷氏ほ場

旭川市では日の出生産組合の「ゆめちから」の圃場を調査した。根が浅く肥料不足になりがちな転換畑の栽培で、こまめに窒素追肥を行うことで、転換畑とは思えないような立派な「ゆめちから」を作られていたこと、輪作体系の構築と土壤の物理性改善のためにイアーコーンを導入されているのが印象的であった。

美唄市では転換畑での大豆間作小麦栽培に取り組まれている吉田氏の圃場を調査した。レーザーレペラで均平化されている圃場は大きな区画にも関わらず、生育ムラがほとんど見られなかった。大豆間作ばらまきでは、ドリル播種とは小麦の姿形は異なるものの、ドリル播種と同水準の収量をあげられるとのことであった。赤さび病の発生は、例年よりも少ないとのことであるが、他の地域と比べるとやや発生が多かった。



美唄市吉田氏ほ場

最後の恵庭市では、他の地域と同様に融雪が早かったため凍上害の発生が多かった。その後の生育は春先の好天候で3日程度早く進んでいたが、6月下旬の低温により平年並程度になりつつあるとのことであった。秋まき小麦の赤かび病防除は雨天の合間になんとか実施されているとのことであった。大橋氏の「春よ恋」の圃場はレーザーレペラによる均平化と、海外製のコンビネーションドリルの高い播種精度もあって、非常に生育が均一であった。大きな堆肥場を所有され、そこで作った堆肥を活用されており、また輪作体系の中で大根の前にエン麦野生種を緑肥として入れられているとのことであった。

今回の調査では優良事例の生産者圃場を多く調査させていただいたが、共通していたのが小麦の生育を良く観察して追肥作業などをこまめに対応していることに加えて、堆肥や緑肥をいれること、過剰に土に負荷をかけて物理性を悪化させないことであった。実際に目で見ることはできないが、根が深く入ることが優良事例のポイントである可能性を感じた。

検討会では、6月中下旬の天候不良により心配されていた稔実不良や病害の発生が大きな問題となっていないことに安堵する声が多くあった。これから、最も重要な子実を充実させる登熟期間と収穫期を迎えることになる。ここまで良好に生育してきた小麦は、これまでの生産者と関係各位の努力の結果であり、その努力が報われるよう、今後の気象が良好に経過し北海道の小麦の本来の能力が發揮されることを祈念する。